

図書

音楽家のアイデンティティ

大学院音楽専攻（歌曲科）修士2年

安田夏来

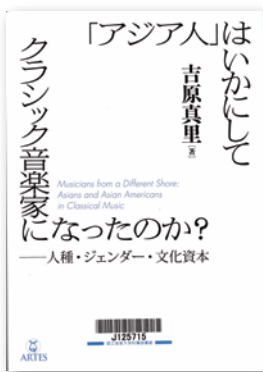
西洋音楽はいつから私達の傍にあるのだろうか。自らの西洋音楽を学ぶという選択もまた歴史の流れの上にあることに興味を抱く。

本書は、日本、中国、韓国における西洋音楽の位置づけを歴史的に振り返ることから始まる。なぜアジア人たちが西洋音楽に多くの投資をしたのか、またどのような目的に使ったのか。特に1960年代〜70年代の日本から海外へ「逆輸出」された音楽教室の影響や、中産階級による西洋音楽への憧れのような感情は興味深い。

著者の吉原真里は、米国で生まれ、日本で育ち、11才で渡米後、東京大学を卒業、大学院は米国に進学するという両国を行き来する中で、ピアノを志し、後に学者へと転身した。彼女が西洋音楽とアジア人というトピックを研究対象としたのは自然な流れだったのだろう。中でも人種の捉え方は目から鱗であった。米国で舞台上に本書では多くの「アジア人音楽家」が出てくるが、それは日本人を含む東アジア人の音楽家の他にも、米国で育ったアジア系アメリカ人、アジアで生まれ育ち勉強のために米国に留学した人、プロの音楽家としてアジアでキャリアを積んだ後、仕事の幅をひろげるために渡米した

人、オセアニアやヨーロッパ、中南米などアジアと米国以外の地域で暮らした経験のある複数の文化的アイデンティティを持つ人、またアジア系を含む複数の民族の血を引く人など、実にさまざまなアジア人が含まれている。

本書は、これらアジア人音楽家について明確な定義付けをすることやそれぞれのアジア的共通点を見出すことを目的としていない。アジア人に限らず、日頃私達は常に外側から「分類」されている。アジア人音楽家は、西洋音楽を通して意識の有無に関わらず、その「くくり」を経験していく。その中で、才能溢れる音楽家たちは人種を超越した「音楽家のアイデンティティ」を確立しているようだ。それは、音楽家という人種とも言えるかもしれない。多民族のものを演奏するといった意識よりも、常により良い音を求めるという音楽家を音楽家たらしめる性質である。そしてそれは結果的に西洋音楽への敬意として映るのである。世界で活躍するアジア人音楽家のそれぞれの西洋音楽への想いに迫ることがができる。



『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか?』
音楽家になったのか?: 人種・ジェンダー・文化資本 吉原真里著
アルテスパブリッシング 2013
請求記号●J125-715

● やすたなつき オメガ3とゼロトロンが含まれています。胡桃を食べる。元氣モリモリ。

図書

巡り合い

音楽教育学科 音楽教育専攻 4年

塚澤由実

「この世界はなんて不思議なんだろう。」大学生になってからの私はしばしばこのような感覚と出会います。特に人と人の縁、或いはものとの縁を感じると、そう思わずにはいられません。世間は広いようで狭いとはよく言ったもので、学内や以前の知人・友人と学外で出会った人々が実は知り合いだったなんてことは何回もありました。さまざまな巡り合わせの下に生きている私ですが、実は本日ご紹介する「栄華のバロック・ダンス―舞踏譜に舞曲のルーツを求めて」も2度の出会いがありました。

この本との最初の出会いは私がまだ高校生だった頃のことです。地元中央図書館で試験勉強をしていた時、書架にあったこの本が目が留まりました。当時通っていた国立音楽大学附属高等学校ではバロック・ダンスの授業があり、個人的には楽しく取り組んでおりましたので、背表紙に惹かれて思わず手に取ってページを開いてみました。そして中をのぞくと、なんと今取り組んでいる作品の舞踏譜が載っているではありませんか。読書は得意でなく、詳しくこの本を読むということはしませんでした。舞踏譜のことは美しいと感じていたので、図書館へ行く

と時々ページを開いて舞踏譜を眺めていました。
 2度目の出会いは昨年春、大学3年生になった私は以前より興味を抱いていたヒストリカルダンスの授業を履修しました。すると、担当の先生は図書館で出会ったあの本の著者ではありませんか。教科書はもちろんこの本です。1年間、教科書を読みつつ身体を使ってメヌエットやガヴオット、サラバンドなどのステップや、舞曲ごとの雰囲気、エネルギーの方向など様々なことを感じ取り、高校時代よりも深く勉強することができました。

今年5月には、所属しているユースオーケストラの演奏会でJ.S.Bachの管弦楽組曲2・3番の演奏をしました。管弦楽組曲にはたくさんのお曲が出てきますが、私が1年間かけて学んだことを活かして作品を勉強することができた。この巡り合いをとて素敵なものに感じました。この文章を読んで下さっているあなたも、「メヌエットってなんだろう。ガヴオットのステップってなんだろう。」と思った時には是非この本を開いてみて下さい。



「栄華のパロック・ダンス―舞踏譜に舞曲のルーツを求めて」
 浜中康子著 音楽之友社 2001
 請求記号●C65-221

●つかざわゆみ 日々訪れるさまざまな方々との出会いを大切に私を支えて下さる皆さまに感謝を忘れず、精進していきたいです。

図書

重力を無視した人間

音楽学部演奏・創作学科
弦管打楽器専修(トロンボーン) 2年 武田聖智

「春が二階から落ちてきた。」
 この本の始まりと終わりのフレーズである。
 春とは季節の事ではない。
 主人公の弟の名前である。
 今回私が紹介するのは伊坂幸太郎さんの重力ピエロである。

この本の作品の舞台であり私の出身地である仙台で起こる放火事件の犯人を追うミステリーであり、家族の在り方を鋭く描いている。事件現場として登場する場所はよく知っている。特に仙台駅前すぐ裏周辺はよく分かる。最初に述べた、主人公の弟である春は特殊な産まれ方をしている。家族は何も変わらないような春が小学生の時に美術展へ出展し最優秀賞を受賞した。家族で受賞作品を見に行きそこで…世間の目は冷たい。それでも春は何も気にしていない。いや、気にしないようにしなければ生きていけなかったからだ。この本を紹介したのは、以下のようなことである。春の境遇と我々、音楽家を目指す者に似通った点があると思っただけだ。オーケストラ

の楽員、ピアノの先生、学校の音楽の先生として既に活躍している方々もかつて、この問題に向き合ったであろう。

音楽を志す、すなわち音楽を仕事としてしようとすることは普通ならば思いつかない発想である。アルバイトをしてみると一般大学の学生と接することがあり彼等よりは自分自身がまじめであると感じた。みなさんもそう思うことはないだろうか。一般人からすれば音楽を大学で学んでも卒業してから生活出来ないのではないかという偏見や思い込みが多く、理解し難い事もあるだろう。境遇に負けない気持ちはこの本から感じてくれると私としてはありがたい。

ふるさととは何かほつとしたものを自分に与えてくれる。郷里の地名を目や耳にするだけでもそんな思いが宿る。仙台は私にとって郷里だ。みなさんにもみなさんのふるさとがあるかもしれない。この本に限らず自分のふるさとが舞台となつた作品に思いを馳せるのは当然である。境遇に負けずに果敢に現実に挑み、たまにはふるさとを思い出すのはいかがだろうか。是非、この本を読んで頂きたい。



「重力ピエロ」(新潮文庫) 伊坂幸太郎著、新潮社 2006 請求記号●SH00186 (自由閲覧室開架)

●ただだせいち ミシェルベッケギーです！「さーし」とは素晴らしいの意味。フランス行ききたいなあ…